

わたしのまちのPR

ピーアール

田尻町編



田尻町は、大阪南部の泉南郡に位置し、大阪湾の沖合いにある関西国際空港の中央部も田尻町に属しています。

「萬歳記」には、^{ほうき}宝亀年間（770～780）吉見小佐治という人が、現在の南海本線吉見ノ里駅周辺を開拓し村を作ったと書かれており、早くから耕地開発が行われています。

この田尻町の特徴などについて、総務部企画人権課長の山本さんにお話をお聞きしてきました。



本日はどうぞよろしくお願ひします。

早速ですが、田尻町は1200年以上、この地を守り農業を続けられていると聞いています。

この地域はタマネギが特産物ですが、まず、田尻町さんの農業を含めた産業について教えてください。

よろしくお願ひします。

本町の産業といえば、「タマネギ」と「漁業」です。

まず、タマネギからお話したいと思います。本町を含む泉州地域で栽培されているタマネギは、水分が多く甘みがあり柔らかいのが特徴である「泉州タマネギ」として全国的に有名です。

タマネギ栽培が始まったのは、北海道とともに国内で最も早く、明治初期からです。

当時、田尻村の「今井佐治平、大門久三郎、道浦吉平」の3氏が横浜から手に入れたものを基に、栽培が始められました。明治時代よりタマネギは、コメの裏作として栽培されています。特に明治の後半になるとタマネギをオーストラリアに輸出するまで

盛んに栽培されていました。

現在、本町でのタマネギ栽培は海外からの輸入物などに押され減少傾向にありますが、国内のタマネギ生産量が北海道に続いて第2位の淡路島のタマネギは、泉州のタマネギが淡路島に渡り栽培が始まったものです。

また、本町にあります春日神社の裏地には、今井佐治平、大門久三郎、道浦吉平、3氏のタマネギ栽培の功績をたたえるため、大正2年に全国でもめずらしい「泉州球葱栽培之祖」いわゆる「タマネギ顕彰碑」が建設されました。この顕彰碑には、要約ですが、「吉見の里は古来、農耕と漁猟を兼ねて生活を営んできた。今井佐治平・大門久三郎・道浦吉平は、土地に適する産物としてタマネギを試作した。産出量も増え、品質もよく、吉見タマネギの名が各地で知られるようになった。奮励尽力し、栽植は進み、海外に輸出して販路を拡大した。吉見タマネギの名は、国の内外に知られるようになった。吉見の里がこれを導いた。」と書かれています。まさに“泉州タマネギの発祥の地がここ田尻町”といっても過言で

タマネギ顕彰碑



はありません。

昭和3年6月には、大阪毎日新聞社（現：毎日新聞社）よりタマネギ栽培功労者として、先程の3氏と現在の岸和田市になりますが、当時の土生郷村の坂口平三郎が表彰されたと記録にあります。さらに、昭和9年5月には、タマネギ栽培50周年記念行事が本町で行われました。

次に田尻町の漁業について教えてくださいか。

本町の「田尻漁港」も忘れてもらっては困ります。

漁港内では、毎週日曜日に地元の漁師さんや鮮魚店を中心に40店舗近くがならぶ「日曜朝市」が開かれ、町内だけでなく、京都や神戸から新鮮な海の幸を求めて朝早くから2～3千人の方が訪れます。

営業は午前7時～12時ですが、すぐに売り切れる場合も多くあります。

お客さんが毎週楽しみにされているので、少々のお雨でも朝市は行われています。雨の日はお客さんもレインコートを着込んで、手にいっぱいの買い物をされています。

鮮魚の他にも干物、野菜、果物、揚げ物などもあり、見ているだけで楽しいですよ。

漁港に隣接してバーベキューガーデンがあります。買い物での疲れを癒す休憩所として利用できますし、午前11時からは、朝市で買ったものをここで調理することができます。家族連れで来られている方などは、新鮮な海の幸でランチを楽しまれています。

また、漁港の近くに「田尻海洋交流センター」があり、田尻漁協さんが船を出して、漁業体験をすることができます。子どもたちにとっては格好の社会学習の場となっています。漁業体験は、刺し網を使った“網漁”と“かご漁”を経験することができます。長靴と救命胴衣を借りて乗船し、沖に設置している網を引き上げると、いろいろな魚やタコが獲れます。漁業体験から帰ってきますと、今獲れたばかりの魚介類を漁師さんがさばいて海鮮バーベキューもできます。子ども達も自分が今獲った魚介類を食べることができますから、楽しく・おいしく笑顔で口いっぱいにほおぼって食べています。

さらに、漁業体験にあわせて関空クルージングも行われています。りんくうタウンと関西国際空港を結ぶ田尻スカイブリッジをくぐって、空港近くまで行き、世界各国の旅客機の離発着を見学することができます。海から見る飛行機は、なんとも言えない迫力があり、子どもはもちろんはしゃいで見ているのですが、大人も童心に帰って子どもと一緒に遊んでいます。

日曜朝市



親子、家族連れの楽しそうな様子が目に浮かびますし、朝市の賑わいも伝わってきます。

次に、田尻町にはすばらしい洋館があると伺っているのですが。

明治から大正時代を通じて関西繊維業界の中核を担い、「綿の国から生まれた綿の王」とまで称された関西繊維業界の大物、谷口房蔵氏（大阪合同紡績元社長）によって大正12年に建築された別邸のことですね。

現在は、「田尻歴史館（愛らんどハウス）」という町の施設として一般公開しています。

ここでは、不定期ですが展示会・ミニコンサートや展覧会等のさまざまなイベントが開催されていますし、個人での見学も可能です。

この田尻歴史館は、窓の上部や照明など家の各所に手彫りの細工やステンドグラスが施され、屋久杉の一枚板も用いられるなど、贅を尽くしたインテリアは見ごたえがあり、「ぜい尽くす紡績王の“城”」まさに“富豪の家”といった屋敷です。

洋館としてのイメージがありますが、ステイタスシンボルとしての洋館と、日常生活のための和風住宅とが融合しており、よく見ると洋風建築のあらゆるところに和風が溶け込んでいます。しかも一階の和室からは、綺麗に手入れされた日本庭園を見ることができます。

この田尻歴史館は、平成17年に大阪府指定有形文化財に指定されましたので、町の皆さんとともに後世に伝えていかなければならないと考えております。

田尻歴史館（愛らんどハウス）



洋と和が融合した建物が田尻町の歴史の語り部として後世に伝えていただきたいと思います。

また、泉州地域といえば秋祭りが有名ですが、田尻町の秋祭りについて教えていただけますでしょうか。

本町の秋祭りは毎年10月第2週の土・日に開催されています。泉州地域の秋祭りといえば「だんじり」がすぐに連想されますが、本町から南の地域では大きな二輪が付いた「やぐら」を曳いています。

だんじりとやぐらの分布境界がちょうど本町の吉見地区になるため、本町の北側の嘉祥寺地区はだんじりを、南側の吉見地区はやぐらを曳いています。

ひとつのまちでだんじりとやぐらの両方を見ることができるのは、府内でもここ田尻町だけです。

また、だんじりとやぐらが町役場前で揃う姿は壮観で見逃すことはできません。

やぐらは大屋根、小屋根や彫り物はだんじりと変わりません。大きく違うところは、四輪ではなく二輪であることとやぐらの前方には音頭取りが乗り、後方に太鼓が設置され、太鼓を打ちながら歩くことです。しかもこの太鼓は女性もたたくことができます。音頭取りの音頭、太鼓や笛の音に合わせてやぐらを大きく蛇行させたり、シーソーの様に上下に上げ下げしながら町中を練り歩きます。

秋祭り（やぐら・だんじり）



田尻町ではだんじりとやぐらと両方が楽しめるというのはいいですね。

他にお薦めの場所がありますでしょうか。

「田尻スカイブリッジ」は、とても綺麗でお薦めの場所ですね。田尻漁港を跨いでりんくうタウン北地区と中地区を結んでいます。全長338.1m、幅26.3m、高さ110mとコンクリート製の橋としては国内最大級の斜張橋しゃちようきょうです。

また、車で渡れば一瞬で通り過ぎますが、橋の両側には歩道がゆったりと設けられていますので、一度歩いて渡ってみるのはいかがでしょうか。渡る前はかなりの距離に見えますが、渡り始めると橋からいろいろな情景をみることができますのであつという間に渡り切ってしまいます。

ジョギングや散歩をする人、のんびりと景色を楽

田尻スカイブリッジ



であいとふれあいのある元気なまちとしてこれらからも発展しますことを期待しております。

本日は、お忙しいところありがとうございました。

しむ人など人通りも多いです。

田尻スカイブリッジの中でも一番お薦めの場所は、橋の中心・主塔の足元にある展望スペースで、ここからはじっくりと景色を満喫することができます。

北には関西国際空港、南には青く連なる山々の豪華な展望を心ゆくまで味わうことができます。

この周辺には公園やビーチも隣接していますし、これからの季節は涼しくなってくるので、ご家族、恋人同士でも、楽しむことができると思います。是非、足を運んでいただきたいと思います。

※斜張橋…高い塔から斜めに張った多数のケーブルで橋桁を吊して支える形式の橋

最後になりますが、田尻町さんの今後のまちづくりについてお聞かせいただけますでしょうか。

本町は、小さい町ですが、「小さくともキラリと輝く町」また、関西の玄関口として魅力あるまちであり続けるために頑張っています。

いよいよ、来年8月には関西国際空港第2期滑走路が供用されます。現在よりも多くの方々が関空を訪れることとなります。

りんくう都市の中核に位置する本町としましては、世界の人びと・近隣の人びととの“であい”と“ふれあい”を大切にし、どのような年齢層の方にあっても、みんなが“元気”に暮らせるまちとしてあることを願いながら、関空を始め、漁港などの既存ストックを有効活用し「海と世界に拓く^{ひら}まち・たじり」として、まちづくりを進めて行きたいと思っています。